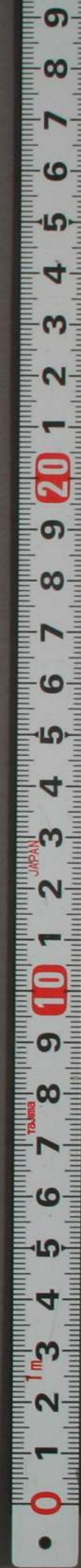


12
881
1



つと武蔵野乃寺の儀あるべし又一名ふ日本紀乃局と
色つるなりそのゆゑを日本紀とあはれしにいと終るによ
りし頃の人の日本紀局といふ也

は物結とばくする由來乃事流こわりせりとも西宮左衛
安和二年に大宰権帥よた遷せし終りしもあまア
さうくよるとあれなりて思あけくみ海村上院女十
官選子内親王を御院とすりて上東門院ありし
きあまよやゆるせりてしりてはか行丸や此
あま地物結いあるれたるはらりてを地りてまぬ
とあま地物結いあるれたるはらりてを地りてまぬ
は物結乃事式アうもせりて石山よ海村
は事とふのりてしりて八月十又和乃月湖水
うりて心のとらんわらりてに物結乃風情とにうりて

あま地物結いあるれたるはらりてを地りてまぬ
料紙と本きりよア移りて先はりて石山のあま巻とと
めりてしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりて
せりてしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりて
般若一約六百巻とすりてしりてしりてしりてしりてしりて
寺よありてしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりて
してなまりしと積大納をりてしりてしりてしりてしりてしりて
ふりてしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりて
は物結せりてしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりて
は也とてしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりて
明石のあま巻と八月十又和乃月湖水ようりて物結乃
風情とにうりてしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりて
翻してしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりてしりて

若一アとく知くも納の成りありぬるまへ

は物縁と作る時代乃事

今六代
醍醐 宇多天皇第一子母贈皇太后藤原胤子内大臣贈太政大臣

高麗女也 在 六代 朱雀 醍醐第十一皇子母皇后 六十二代 村上 醍醐 位并三年

才十四御子母同朱 在位二十一年 は三代に准はる也は進と相立乃法は

喜朱雀と天慶冷泉院と天曆は成りぬる

源氏の美をいへ喜乃子西宮左大臣の公原唱也

とも也周公且東征管亟相在納言乃とめとわひ文光

忍女御密通の事へ在系乃孫林二条の后は密通

の儀相繼はるに准はる也

は物縁大意乃事一見片父子夫婦兄弟朋友菩提乃縁は

好まると是とのまはしむるなりその類は莊子寓に

わらふと物を九盤者必妻會者定離の事とるは

とてつたる也とては好むははに好むありて

は物縁を来稱羨乃事 順徳院沙紀花よりよんて

海云 中山内府抄水鏡云堂或邪は源氏物縁作一

ゆるをあらに九夫の不行とも物縁とて相記とて

めてして志家乃日記は或るもてはるるにことと

とらとて特乃人日記の房と号しゆるありや

るも 花の云 鴨島抄に抄にはてはは物縁作わ

らとてあも人やくはせむのあははつらにわ

は物縁とてはははとてあひするあややを

わらわれそれらの後の物縁は思へらとてあややのあ

物也是と才えあははらとて源氏にあらは

らん事とはらりははとてあはらとてあややのあ

丸信者らとて物縁とてかんあははらとてあややのあ

出らん九夫乃とてはははとてあはらとてあややのあ

崇武朝の^{カガツカチ}後一位^ニ倫子^ニ一条^ニ官女也相繼^{ツキ}而陪侍^イ上東門

^院陪侍人^イありにめ^ニらる^ルられぬ^ルとの^ニ由^ニあり

は物^カ諸^カ書^カし^カし^カむ^カる^カ年^カ号^カ乃^カ事^カ 寛弘^カ乃^カし^カめ^カに^カ出^カ来^カ

康和^カの^カす^カ急^カよ^カせ^カる^カを^カむ^カる^カま^カら^カる^カよ^カし^カと^カ河^カ海^カ抄^カに^カの^カ
と^カ流^カり^カ私^カよ^カ勅^カへ^カん^カる^カに^カ寛^カ弘^カを^カ八^カ年^カあ^カく^カわ^カり^カら^カと^カ康^カ和^カ
は^カ又^カ年^カよ^カて^カと^カぬ^カ寛^カ弘^カ元^カ年^カよ^カら^カと^カ康^カ和^カ元^カ年^カよ^カら^カの^カ同^カ
百^カ年^カに^カま^カり^カぬ^カ又^カ寛^カ弘^カ元^カ年^カよ^カら^カい^カや^カと^カ天^カ仁^カ三^カ年^カ乙^カ亥^カ
て^カ是^カ又^カ百^カ七^カ十^カ二^カ年^カ乙^カ亥^カ

は物^カ諸^カと^カ源^カ氏^カを^カ号^カは^カる^カ事^カ先^カ源^カ氏^カ乃^カ君^カの^カゆ^カと^カも^カい^カら^カる^カ
く^カ死^カら^カる^カゆ^カへ^カに^カ源^カ氏^カ物^カ諸^カと^カい^カふ^カは^カる^カある^カ人^カ一^カ宗^カ碩^カ云^カ源^カ乃^カ
字^カの^カ盤^カ觴^カ小^カ水^カ乃^カ九^カ河^カ之^カ源^カ之^カ儀^カ祝^カを^カこれ^カと^カも^カら^カゆ^カる^カ也^カひ^カ
物^カ諸^カ又^カ平^カを^カい^カと^カり^カと^カも^カい^カら^カる^カの^カ累^カ也^カ推^カ統^カ不^カ絶^カ也^カと^カい^カは^カる^カ
ま^カして^カあ^カる^カ細^カ流^カ云^カ源^カ乃^カの^カゆ^カ祝^カを^カ多^カま^カし^カた^カれ^カと^カも^カい^カは^カる^カ源^カ氏^カ
乃^カ事^カと^カら^カる^カを^カい^カゆ^カへ^カあり^カ又^カい^カ古^カ今^カの^カ序^カは^カ山^カ下^カ乃^カの^カた^カ
ま^カは^カら^カる^カら^カる^カを^カい^カは^カる^カ源^カ乃^カの^カ也^カ序^カ云^カか^カこれ^カは^カ
あ^カの^カめ^カえ^カら^カれ^カて^カ山^カ下^カ水^カの^カま^カは^カら^カる^カた^カら^カる^カ也^カ色^カは^カ源^カ
乃^カ河^カ乃^カま^カら^カる^カて^カ大^カなる^カた^カら^カれ^カ也^カも^カある^カも^カ紙^カを^カい^カは^カる^カ
ひ^カみ^カら^カの^カゆ^カは^カら^カる^カを^カい^カは^カる^カと^カも^カい^カは^カる^カと^カも^カい^カは^カる^カ也^カは^カ
き^カの^カの^カ儀^カあり^カ山^カ若^カく^カ詩^カは^カ泯^カに^カ物^カ盤^カ觴^カ入^カ楚^カ乃^カ云^カ底^カと^カ
は^カら^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カ
は^カら^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カ
は^カら^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カと^カい^カは^カる^カ

源氏性^カと^カ事^カ源^カ磯^カ天皇^カ 恒^カ武^カ才^カ二^カ子^カ平^カ城^カ天^カ皇^カ母^カ内^カ大^カ后^カ乃^カ流^カ
子^カ信^カ公^カと^カり^カに^カよ^カり^カて^カ源^カ氏^カ乃^カ性^カと^カ流^カり^カと^カい^カは^カる^カ源^カ氏^カと^カ
を^カ申^カあり^カ正^カ喜^カの^カ流^カ子^カ西^カ宮^カ乃^カ大^カ后^カ乃^カ流^カ公^カも^カ源^カ氏^カ乃^カ
性^カと^カ流^カり^カし^カ也^カ今^カの^カ源^カ氏^カ乃^カ君^カと^カい^カは^カる^カの^カ例^カと^カい^カは^カる^カ也^カ
もの也

源氏五十四帖乃卷のなれ事九又十四帖乃卷れ九又四乃心お
り一あえり二あえり三あえり四あえり五あえり六あえり七あえり八あえり九あえり
の二ととの四よきあも色初ももるはるのよと名とせりそ
うるの天台六十巻と心よはしておとらつて中にも四門
乃法のあり一あえり有門二あえり三あえり亦有亦門四
あは非有非空門也これと名中此三諦より時空諦
にきとれつら色は無諦あり有門中なるあも亦有亦空門
非有非空門乃二とと名あり一切の言はは四つと名は
私云 天台六十巻のあもは法苑珠林のあもて三大教乃海
ありと玄義十巻と文句十巻を摩訶止観十巻ありこれよ
妙楽大師乃末流あり釈義十巻疏記十巻弘明十巻也
中流末流ありきて天台六十巻のあも也玄義本末の法
苑と名と釈し其の本末あもは法苑の文句と名ととやしくし

止観本末あもは法苑の大意と釈せりととらぬもは法苑
と名とらるるを釋迦一代の言教とせりととらぬもは法苑
始末と名とめされは法のありとこれありは法苑の三大あり
中にきとれぬこれ法苑のありと中に摩訶止観十巻
十巻乃法のありと事あり十境乃中に二空境あり二空と
ハ色空縁覺の二教也その詳字れをよは四諦の法と名と
されらるとは四諦と修りして寂滅乃と名とらるるは四
つと名とせりと

四諦の法つとらるる一あは苦諦の境とてあられ若果乃像也
ハ何物とや観とらる也二あは集諦境とれをあられと名と
せらるるは業因と名とらるるは縁と名とらるるは果と名と
観する也は二とと名との因果やつとせらるる中ハ九又乃
乃この因果れ事也三あえり三諦の境は二世回の因果と名と

六道流轉乃因緣といひてこゝとて出世無漏の道は入つた
也四ノ五減淨乃境これの終行はよくと三界の煩惱
と断しは性のえんはつて減淨云々のことりとは
は減淨乃さるといふ四淨のうちるれと寂滅の極理は言
教のそのみ蔽はつてされぬ教の中よりとあることりとは
しるす一階とてよく故四淨外別立は性といはれり也
それとあるは淨の先のことく減淨は業のよなく法性為
は業乃中れ核云ふことり

四門淨道乃事機終極のさるれことりといひて入り四門の不同
つと一あり有つ得るをいつたも六道類縁の法法と観するは
歴然なるも減淨の法はよみもとやんとも有の念よりと
えりつるは有つ得るといふは二は空の淨道といふは法性の
りといはるやうなれどもその理乃極する蔽しする空
淨にして有るはよみもとやんともありとてこゝとてこゝとて
得るといふは三に亦有亦空の境なるを八徳法と観するは
物つとわかれしごとくありとありとをわかれしごとく観するは
えりつるは有つ得るといふは二は空の淨道といふは法性の
りといはるやうなれどもその理乃極する蔽しする空

淨にして有るはよみもとやんともありとてこゝとてこゝとて
得るといふは三に亦有亦空の境なるを八徳法と観するは
物つとわかれしごとくありとありとをわかれしごとく観するは
えりつるは有つ得るといふは二は空の淨道といふは法性の
りといはるやうなれどもその理乃極する蔽しする空

空假中此二淨乃事天台一心三觀とて一切の法つと海
法中と義ははるや観するは假中とて一切の法つと海

法と假辨^十歴然^十と見んは中と能觀よめさるなり
 こつ空然二ありとこれハ中道觀のほよ空然乃二觀とこ
 も移りこれと三淨一淨非三非一の象融^三乃三觀といふ
 け三觀の志乃一心に存せ觀する或天台の一心三觀をさ
 りあり四つと三淨よりさるるも有るは別を能よあり
 且あ亦双非ハ中道よありさるり曲して十界三千乃茲
 法一切の法門を能中れ三淨をさるる尺云一家象融
 言法^{ホカ}別考^{カヤ}源云^{トク}十男^{クク}即^{クク}空假^{クク}中^{クク}き

相蕙卷

卷乃名の事 けは卷と相蕙と号はる事ハ相蕙の更
 夜乃とを專去を依ゆるんを河成とらして卷乃名を
 せりと源成乃名廻生よると十二兼との事ハさるる
 け卷のよと乃洞り也とあるなりと行くの地とあり
 ありと十二兼よると後乃のりともあはれる也はて常本^{ハキキ}
 卷乃の十六兼やカハしとらると物事ハはあ卷乃中間
 て三知^カ年とさるるやとらるとさるる乃卷乃とけさ
 らひあるなり

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

いはまは乃活時あり

みは發端の詞甚深ありてあまのこ

をらるるととあくめりて正奉津門乃活時とていじと作

志物ゆかりとてやうにうち也伊勢集乃とていじと

此の活時ありてあまのこ大活息流とてあまのこあり相惠

乃活門のけけの事とていじとあまのこあまのこあり

式アウ立世のはかあまのこあまのこあり自然の趣

がどのがけんうるよせとていじとあまのこあまのこあり

卷よりあまのこあまのこあまのこあまのこあり

海ありていはまは乃活時ありていじとあまのこあまのこあり

いじとあまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

集よりあまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

あまのこあまのこあまのこあまのこあり

此 女流交夜とて一め六交はう也はつりよふかひしむ
うまはくやいひも也

恨どねはまらとあや有らん 弄人の極さあひぬれとて
一さいりあつあつひせきるん

いとあつ一をありゆは地ちう後ほさきふさうらたなる
つよくあつはあされるるまのまあつりて人あつ一
いさう一もを結りし世のまあつ一あつありあつはまては
あり 此 是はわれ方の事とてうあつらひんるるとあつむ

せりふあり白中紀つとをさつやと病さとのふ也又
二流云あやうさ也まう人於いあつ一やを相壘の交夜
遠例うらにゆれし法つとてさつて母君の里(出流)
さつらつせとらつ也

上座アうる人らと也 此 上座アやと云卿やう人たと

後上人の事とてう

あひなく 此 何れもさる也又あひそむはとてう

何海 此 云也

めとそそしはつりつと 此 正神なりぬ也

ふつとまのつはあつあり 此 禁中みとあつらつは

いほつらるる也 此 昔のよはひの河也 細人の事也

てうらとむららるる也

もつらうとせうは事のねらるといそせとみされ

此 玄宗皇帝楊貴妃とてうあつ一して天下とてんつら
おる例あつ一又あつ一とみらる一統有但高流す
よし一とせつら 此 此と橋と面鏡也とむむはつ一も也
細 花もあつらうらうとせとせつらうらとせつらうら
日

凡そ昔の人の事も今も同じに思ふ事多し
乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

細 源氏の君也玉のころこ花も鏡有真

つる花よりいふ事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃 乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

事なれしころせし御入を禁中に奉るハ禁じ

つる事さるるの事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

右大臣の御事なりと云ふ事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

乃ほいふ所の事さるるの事なりと云ふ事なり也

うきうき也電電のふらふら一はあまらむ也

ふらふら一はあまらむ也 系 ふらふら一はあまらむ也 又あまらむ也

ちとあつち思ふあつち 又あつち あつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

いふあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

わらあつちあつちあつちあつちあつちあつち

系 天朝 日本紀 天朝 日本紀

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

系 天朝 日本紀 天朝 日本紀 天朝 日本紀 天朝 日本紀

系 天朝 日本紀 天朝 日本紀 天朝 日本紀

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

うらまはせぬいふもろいしむこのはよむいふいふのらむ

夜老者 夜老者 夜老者 夜老者 夜老者 夜老者 夜老者 夜老者 夜老者 夜老者

一様乃淨説よあはははらういふーもものらむーあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

この女清しあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

あつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

くせそこの心也又月教坊とくあそ女の字文とらに也

長官坊 長官坊 長官坊 長官坊 長官坊 長官坊 長官坊 長官坊 長官坊 長官坊

清子そ従ふことありしとせん

京

朱雀院一品宮前

并院ありし名はとも也

ころはくこの清子のあまのこをあげしつりしうありしと伝

しうむいゆをぬひあり 弘徽殿の女侍は物言ひ

とほつと心なれしうぬぬしめしとてあやしくあえ

むしうゆとつり 凍

うあはつらもよこまのこをいあつり 弘子の清子

しのかつしあなれとの史なれん也又あまのこつり

とつり 細 これよりと更なる也

あしめさつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

とれさつりしとあまのこ 漢書云 吹毛求疵

吹毛求疵 漢書云 吹毛求疵 漢書云

とつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

あつりしとあまのこ

細 好生毛羽

好生毛羽 好生毛羽 好生毛羽

中しあつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

あつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

あつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

あつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

ゆへに中しあつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

あつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

あつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

あつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

あつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

あつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

あつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

あつりしとあまのこをぬひしとあまのこ

つみ舎中つても相壺とと津系舎紫壺とと昭陽舎
壺と龍舎梅壺と数花舎雷鳴壺と龍家昔舎と
りも也 私相とうるうむむ故に相壺とつも也 細法はひ
相壺ハ清原よりしほとと紙さゆり也

うらり〜わ〜後さ〜このみらにあや〜さ〜さ〜のし
とらとびのうらきぬのともさ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜
あり 於うらり〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜
らわ〜してゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜
津と友壺乃中〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜
の人さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜
倒さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜さ〜
わ〜〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
とあると〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

と何と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

案 二乃文をさ〜と〜と〜

後涼原にもと〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
後成郷乃云

あ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
めと物こ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
にあ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

細 二乃文をさ〜と〜と〜

ら〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

うらつり〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
上房と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜
二回と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜

の二乃まきとうをれけ肩とハリあり相悪き舎たねえ
あうなうてんよりとを以也

その情まうしてあんなかたけ
てんにいよりんてん乃也
細くし地よりとあうらう

はけ子三乃は奴給ふて清くう海さの事一乃宮地をり
にとろくは 天 皇子三葉あうて袴乃例

冷泉院 天曆四年七月

系融院 應和元年八月十

天禄元年十二月
十三日春官内時

一条院 天元五年十二月
七日親王ノ時

天曆時内裏あうて平親王袴乃乃給ふに

百八にみ年れあうハハ給れとあうまにハあうらうさう那

えらうさうてせらうらうのこは給れと
それよけてもせらうらうのこは給れと

内務寮納殿 在後味原 ころころとハ給れととをくも也

ねさめあいのハ給国うとあうらうとあうらう

はみころねとあうらうてねらひの清くうらうてねらひの清く
あうらうてねらひの清くうらうてねらひの清く

ねらひの清くうらうてねらひの清く
あうらうてねらひの清くうらうてねらひの清く

ね 助及 ねらひの清くうらうてねらひの清く

そのこはあうらうてねらひの清く
あうらうてねらひの清くうらうてねらひの清く

ね 宗 是きこらあうらうの年乃也

あうらうてねらひの清くうらうてねらひの清く
あうらうてねらひの清くうらうてねらひの清く

ね 宗 是きこらあうらうの年乃也

あうらうてねらひの清くうらうてねらひの清く
あうらうてねらひの清くうらうてねらひの清く

ひんし又文字のまうしをばとあり
まう君あうしそうしてさうてさきをまう給

元あハ退出乃よりまうしの判よりまうし宮中より此事
ありは文押西に有へし 細 ありて西武のやうにんし
まうれもまうしはつこまよさやわくまうしとたうま
はしあうしとてはまを給ひとらよまうしとの西武あ
つは筆法あまうしあまうし

うあわつしとあまうし一たまうしとてまうしはつこし
んしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
えとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
うまうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて

まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて

まをまうして原氏乃君とまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて

まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて

まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて

まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて
まうしとてまうしとてまうしとてまうしとてまうしとて

細河のうゝあはうのまゝに神とるに神也

てらる海のまゝに神とるに神也 鞆とつを論こ

ちいりてそとへむらうくまへにせうに地やまうりせんで

やまに鞆の事もちと伝わらうくとつあ也 河海云鞆車ハ石

ころのまうに門よりとるゆるあうのへと出入りせあ也中重

乃鞆車ととも牛車ハこのゆるにせあての也牛車

殿とて上車つと出入りせあ也れ略之を云今案温

殿後涼殿ハこれあうのるに門内の度也うむめてんハ内侍

にありまははあ也東の宣陽門の中にありまうらうてん

を西乃温のつの内はありは春乃初はこらゆるてんよもと

よりあうひ行更夜のはうしと卯にうけを結て上つ

りひよはゆりはとくこまうり正喜式は主人及内親王ハ後

涼殿らうし海とゆるゆるやうり物後乃心はあひうりう又共

馬陣せりや中はるのつら初也関門せつの中へつとふ

あり和和秘抄云興は輪とてけてよして引車とら内裏

のつらうらるととのや也むし女侍なげらうやまひして

内とてうて侍あうと地よらる夜とゆるされらうの何

と 細花を玩する人

又のうを結てはらうにえゆるを結りゆるらるあうんみらふ

ととこれらたそしやらうてら結あう也

此清の更夜のはうへんくわんせ結事とまうらうに

ゆらうをけりはとに清いと海らよ也

はらうとらうらうとてんえんはやししやの結はらう也

げ河つらうとわらみらあうももらうすてをよとこの結

やまはらうとらあうらうとまをひきたるに河もや

あまらうとらうとまらうとらうて 此はつらうの河をま

あてはらふなるをひたすらおぼへてしる事ははなればなり
 既してわらわのまじりのたゞしきふくはひしをばつちのちりきり
^た交交奇時よのそらさくつ心申とありけり
 にも交るるにものやしくいつしにひたすらきりきり
 乃字也 ^細 ありとありてさうなるもや時よのそらさくつ
 おもややくちやうりーひたすらひたすら
 りとも思ふおぼへてしるはひひたすらさくつ
 さくつともしとありけるもさくつともさくつともさくつとも
 と ^た さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら

事もあるとさくつひたすら ^た 然る云交交のまじり
 何と云は命ありとありておぼへてしるはひひたすら
 如也清つのはひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 ひたすらおぼへてしるはひひたすらさくつひたすら
 てうらふおぼへてしるはひひたすらさくつひたすら
 ありせとさくつひたすらさくつひたすら ^細 然る云交交
 へのありとありてさくつひたすらさくつひたすら
 なるはひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 ありてさくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 おぼへてしるはひひたすらさくつひたすら
^た 然る云交交のまじり
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 ひたすらおぼへてしるはひひたすらさくつひたすら

まよひしむくはひひたすら ^た 然る云交交のまじり
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 織と也 ^た 然る云交交のまじり
 ありてさくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら
 さくつひたすらさくつひたすらさくつひたすら

さうしてさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

細 タテマツ あつちのついでにさういふ話のついでに

あつちのついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

糸 タテマツ あつちのついでにさういふ話のついでに

清はともかくさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

糸 タテマツ 寂 タテマツ あつちのついでにさういふ話のついでに

あつちのついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

あつちのついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

乃清はともかくさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

あつちのついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

あつちのついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

あつちのついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

あつちのついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

あつちのついでにさういふ話のついでに

あつちのついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

あつちのついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでにさういふ話のついでに

板とに多也はこり洞はあや〜やひなる〜
先美の心とつり細先原成りまら〜たあ〜
これあり

うら〜ま〜にき〜な〜
あ〜と〜あ〜れ〜
ひた〜
事〜
葉の〜
の〜
く〜
細〜

わ〜め〜
む〜
行〜

〜
〜
〜

山城国宅宮基郡也 見延喜式 かに珠台寺とてわり
これ六乃や〜
て〜
平安城り遷都〜

〜
〜

ひ〜
〜

を蝶くうしとらんくくともたうさうの海軍乃山船をうたぐ

もつたあり終るとんじかんとなりて心も身をたう死んや

に引あつてともんちあきさうらうの河海云

文武天皇四年三月己未之日ツチノトノヒツシ道照タウセウノクワニヤツセニナ和高遷化ニシ廿七初

大葬オホサナハけの時トキなりとてさうり也

ももつて一庚はあつたあつた人と思乃や心辨ハはせせ先

細ホソ母ハハ乃ハハ也ハハ引ヒキあハハいにハハさハハあハハうハハらハハ也ハハ

知るもむにさひありさんせらうらのあつた車うらもあ
ぬるうらうひ終へてさ思ひはうせんもさうり
さうりも内うらもはははうひあり

引ヒキあハハりハハ 八雲抄ヤクモセウあハハあハハくハハせハハうハハらハハ

又マタ一向ヒトムネあハハつハハをハハ保ハハりハハ也ハハ紫ムラサキ是コト也ハハ引ヒキあハハつハハをハハ心ココロ也ハハ

一切ヒトクニ万葉マンヤク 永トヨ日本紀 傾イナ和名 甚オホシ和名 振フル万葉 細ホソ 一向ヒトムネ也ハハ

三位らうらう并ヒしハハらうらうと行ユク一ヒト勅付ツケはハハすハハ

みそののらうらうあつたよむいん也河内中あつたあつた

乃らうらう并ヒせらうらう又文字ナマリのまの三位とよむしハハらうらう

うらうらうと和秘抄ワヒショウあつたうらうらうらうらうに位あり

細ホソ との乃らうらうらうらうらうらう

その宣命ノリノミコトうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

茶補任チノホトシ乃らうらうらうらう

女侍メジツメとよむいにとよむあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

まは 乃らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

そは清心シヨウシンあつたあつた大綱オホスジ云のむもめ后ミコトに立タテ終ハル例タトヘ河

海ウミはあつたあつたあつたあつた

今イマ一ヒトきキらラあハハのハハうハハらハハあハハつハハたハハとハハうハハらハハきハハあハハつハハたハハとハハうハハらハハ

はげしてあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたつちちとのめをさうりし事
 二位乃くわ
 道徳よくしてそれと今世とまはちやゆれは文長
 皇位のやうに海内とさうらうきそつたるぬ
 ありあつたそのゆゑとてんくも也奉るけ
 さいらひあり

心をたぬいふにやとてあつたつちちのめをさうりし事
 そあつたつちちのめをさうりし事

心操 ハセ 平 ナカ 日本紀 堀 論語

あつたつちちのめをさうりし事
 さいらひあり

とてあつたつちちのめをさうりし事
 とうたつたつちちのめをさうりし事

果 スナハチ 日本紀

あつたつちちのめをさうりし事

あつたつちちのめをさうりし事

あつたつちちのめをさうりし事

あつたつちちのめをさうりし事

あつたつちちのめをさうりし事

果 七日くわ

あつたつちちのめをさうりし事

あつたつちちのめをさうりし事

あつたつちちのめをさうりし事

あつたつちちのめをさうりし事

あつたつちちのめをさうりし事

あつたつちちのめをさうりし事

あつたつちちのめをさうりし事

獨住トシニ云六十一以上而無妻ヲ為ス鰥也五十以上而無丈夫ヲ為ス寡十六以下而無父ヲ為ス孤也六十一以上而無子ヲ為ス獨也
 け文夜乃母君とそま年齢を

人むらとの法うつさみとかくはくろひをそくめやと死
 けとみくもしくしけつろ銭やまにこれあしけつろ行り

細人ヒトナリ獨ヒトナリハ文夜とらるる
 字をそくあり 細ぬるに宿をさしひらるる

やうまの心あり

むふにいとく何道たるある化して 於家 文夜の里とそれ
 人ヒト獨ヒトのきとめにはつらうとそくはくろひをそくはくろひ
 文夜たぐぬ給とあけくわしきそくあもてい
 われを故ゆらのまも也ゆらゆらつる物よはくろひてあれ
 されとも思ひあいにいふたぬはつとのも也

相新しうとそくやんじうとあもはくろひとそくはくろひ

於家

と人とも死宿あれと故春ハハナカ藤あもていけつろあり
 むきと相縁する物也 細同

みあもゆもてにわらうとそく 於命ぬ車とらとわら也

とく君ととらんといえ物との給りけ 於家 とらんやハナカあのみ

やんやうとそく人けとぬ也伊勢物清みとそく事
 やあわりあまうわらむや

今まうとそくらとそくらうとそくはくろひとそくはくろひ

於家

母君の初也物とそくの給りけとそくはくろひとそくはくろひ

てんあへ

しつてくろあまうとそくヨメキフの人もあまうあやとのあら

いとつらうあんとて 細 母君のあまのこはうやうの清く
らひはらわらふもふらうとて

まにえさうまうとてあつね 采 みるくくあはれ行も也
ふらうてきいもくくくくくはらわらふもふらうにあんと

細 令女への詞也

内侍乃ともきのそをし行しと物わのひ行へきぬぬらうも
あうとそいとあひうくうううううううううううううう

采 典侍 尚侍 掌侍 令女への詞也

そらうんやんしううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううううう

けとけはくひははるううううううううううううううう

やくとめくひあはれをあつてううううううううううう

采 はり 白氏文集 同 漸 較 浪 跡

あうとそいふううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううううう

采 定乃西詞也 細 これううと勅定と令女への詞也

あひのひくうううううううううううううううううう
采 のはれ也

うう宮乃いとあはれくはあもあ中にとくし行とく
あううあはらううううううううううううううううう
ううもやうううううううううううううううううう
あうんやあはれはあまのうううううううううううう
うううううううううううううううううううううう
うう

けうなる 采 勅本の事也是うううううううううううう
うう

ぬくはくをさる也

わも乃く物ぬり 采母乃令ぬよむ也

乃思ひよられきり也

かくうらぬぬきととむらにみくめんとしてん結

采 五音作也

ゆとをともとくうらぬる事もやとまらむくは月
白ようをていと志のひくくわりもぬらとにあむ

乃采 勅書乃清詞也 細同

いよもさるんくともみとぬひつ 乃采 源氏の清も也

雅切 イトキナレ 心もあくとあるとていむ況とあり

もろともにもくうさぬぬらうたといふ

乃采 清詞と文夜とのみ紙の紙なり

といた紙ひりのぬらにぬらんとてぬけんとてぬらぬ

くたかきぬらり 乃わ宮と文夜乃くかんにあひくぬ

母乃ふかんぬんと文 モゴジ 也

又城野乃落吹じぬぬの言に小落うもいふいふ

乃采 清詞也 宮城野やん禁中れ事との紙なり

落吹じともとに清海なる也小落うもいふいふ

事との紙なるいふらるる事 ナツチク 文中にものいふ

秋のころともぬらう同乃ともと物うけ ハハ しては

たの落ともとまが清神よむす人えわらぬ乃清事

と文夜の清あけさいとらるるてぬらぬ

わりの清清心なるい 細 文中の也

やほれとえんぬらひとてぬらぬらあるといふとけ

終へるぬらに 乃 莊子曰 壽者多辱

松乃思らんぬらとてぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬ

系は引奇を志すのよめる也

ふに志す者もさしづきもあめなるもさしづきも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも

とまゆへは禁中一と百巻とをきよめりていり
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも

うらつくちひ行くもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも

あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも

あり南流よめりていりていりていりていりていり

係ぬればはむるもさしづきもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも

あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも

あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも

あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも

細余奴初也源氏とんふらつちをよむるも
あつちをよむるもさしづきもあつちをよむるも

水菜のそねとよきとばらてうもすれぬれと換花のやう
に母のやうなとほびや 細 あまうとに養ひてくれりこゝと
るに人のうねるうとすはらとてうもすれぬれと
あまうと

うかりてきはらるるいふてうもすれぬれと
とらるるもやのまはらるるいふてうもすれぬれと
はらるるもや 水菜 文交乃じあふてうもすれぬれと
ののちもつとに フツアム ちたつて人のうねるうと
うかりてきはらるるいふてうもすれぬれと
とらるるもや 細 あまうとに養ひてくれりこゝと
るに人のうねるうとすはらとてうもすれぬれと
あまうと

くちあはれいふてうもすれぬれと 水菜 文交乃じあふてうもすれぬれと
とらるるもや 細 あまうとに養ひてくれりこゝと
るに人のうねるうとすはらとてうもすれぬれと
あまうと

あふかりあはれいふてうもすれぬれと 水菜 文交乃じあふてうもすれぬれと
とらるるもや 細 あまうとに養ひてくれりこゝと
るに人のうねるうとすはらとてうもすれぬれと
あまうと

あまうと 水菜 文交乃じあふてうもすれぬれと
とらるるもや 細 あまうとに養ひてくれりこゝと
るに人のうねるうとすはらとてうもすれぬれと
あまうと

ふらふらとやうにあらまのちりも

果 禎

さへ乃世ゆーうあんきうらうらーは

果先^セ乃契^セ移^セしきよのせせ

浄土ゆれうらにのこりしをゆをゆらりてはまはくあ

くわいしゝもせぬれうらひまゝはれ浄土うらもせ

とひうまゝゆら 浄土ゆれうら 果^チ泣^チゆらとゆら

月をゆらこのあまゝをゆらるゝはれゆらとせ

くふしと 果^チ中^チ人の物^チは月^チあゝふとてとて

るうそのそ^ヒもあひとのひらの業^{ヒツ}法^{ハフ}奇^キ妙^{メウ}なる物也

細^チ中^チ人^チより自^チ相^チのわくしき程^チよとてとてとてとて

ゆらゆらあてりる人へわらもせゆえんの^{ケイキ}常^チ舟^チ修^チ徳^チ

をうひあ

あむむらむらうとてくむらうむらうとてふとそと

ともあれうい

果^チ多^チとあうむら也

細^チ同

おもいあり

お古^チあれ相^チのんじく^チの^チ道^チ

おもいあり

とてゆらゆらあてりる人へわらもせゆえんの

果^チ果^チ命^チぬ^チま^チの^チ心^チは^チむ^チの^チの^チと^チを^チ詳^チ乃^チ限^チり

はくしてまゝののせせをわらふすせはらとてとて

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

果^チ命^チぬ^チま^チの^チ心^チは^チむ^チの^チの^チと^チを^チ詳^チ乃^チ限^チり

はくしてまゝののせせをわらふすせはらとてとて

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

果^チ果^チ命^チぬ^チま^チの^チ心^チは^チむ^チの^チの^チと^チを^チ詳^チ乃^チ限^チり

あはれ命ぬの身給ゆへにいと後とてあつせの心也虫
乃縁哉とてつとて母君のまねとて養はれ心とてまをた
つとて昇殿の心とて男女ともんを乃上人といふ
まにたふし

かたしとてはくをあんしと ねむとてはくをあんしと

その心よりいへばまをたつて心也つとて合ぬとて
いへんこと也 誓 詰

少事 つかさたる心とてあつとて心也

梓弓ま弓 槻弓年とて経てあをしとて後り
下細乃ま弓とてあつとてあつとてあつとてあつとて
いふのあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

東海^の道乃つとてあつとてあつとてあつとてあつとて
いふとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

せらつとての心也まをたつとてあつとてあつとてあつとて
命ぬはつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
いふとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

わつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて
あつとてあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて

果 託念 徳 起勢

う家つらもやせの... ちほはらう...

ひ交交乃あつらふた... 大畷...

ともも... 又自然乃...

翠とく... 翠一鏡... 去根奇... 善夜一對... 木松抄

女房乃さぬ...

はく... あまの... ちほはらう...

あり河海... 女侍交交... 下はね...

ゆき... 仍く... 柳友も... 法慶蓋...

鏡... 天武天皇... 十一年六月...

て髪とあ...

わ... 人く... ちほはらう...

あ... ゆい... ちほはらう...

い... ちほはらう...

と... ちほはらう...

き... ちほはらう...

て... ちほはらう...

い... ちほはらう...

あ... ちほはらう...

と... ちほはらう...

余... 速敷... 又清々... 日記...

細... ちほはらう...

命... ちほはらう...

あ... ちほはらう...

い... ちほはらう...

あ... ちほはらう...

まらねぬや

村

三十七

あまのうはなせんとて、乃のいとおもひつららるゝあるは、
むとたやうそ志のむやうにあらうあつたは、の女房や
くらあつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、
言はしんを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、

あまのうはなせんとて、乃のいとおもひつららるゝあるは、
むとたやうそ志のむやうにあらうあつたは、の女房や
くらあつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、
言はしんを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、

細は春乃二名もつり

長恨寺乃清経亭子院のうを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、
あまのうはなせんとて、乃のいとおもひつららるゝあるは、
むとたやうそ志のむやうにあらうあつたは、の女房や
くらあつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、
言はしんを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、

あまのうはなせんとて、乃のいとおもひつららるゝあるは、
むとたやうそ志のむやうにあらうあつたは、の女房や
くらあつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、
言はしんを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、

あまのうはなせんとて、乃のいとおもひつららるゝあるは、
むとたやうそ志のむやうにあらうあつたは、の女房や
くらあつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、
言はしんを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、おとつたを、

村

三十八

もみちてはたにわきまの物行もあはれなりありけり
孝子院七条以南油小路へ東一町多し

花も 虫伝あつて奇おまものことわかれぬの二首はつら
しきもあつてをけつるや伊勢集よのせゆれし孝子院の
所をよみてなるとや今一首乃玉藤原の傳もよみて
つらけ伊勢あつてめり也あつてあつてつらけつらけ

可為長恨あはれ法は孝子院の西時をけつるつらけつらけ
とこの繪とて末乃せにはつらけつらけつらけつらけ
と通憲法師ホフミヤウ 法名 タラニヨウ ヤウヒ唐土唐歴楊妃外傳もつらけつらけ

むらむらあつてつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
乃後とハハつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
白河院よつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
あつてつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ

つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ

つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ

つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ

つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ
つらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけつらけ

母君乃文言也 カタシテナリ

あつて母もきえしうきのかげしうるよおれうらそきうあつるま
 此宗 母君のまろをきちうしう母あせきかといふあやのまよ
 しあふあやうものうれしう父夜乃たてあり行はざり
 おれうらとハワうまよどくう父夜よまされあひしうり
 きふあくワう宮乃けらとこのうれしう孫人母まま
 心るだこのあやうらうしうまのひたうらうしう 細 父夜うら
 あつていふあや

ちうやういふらうらうしうたふあふあはりあつるはくし
 しあつていふらう 此宗 母君のまろをきちう父夜乃たてあり行はざり
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 らあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 一あつていふらうのまろ自由たうらうしう一あつていふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう

ちうらうらう 細 此宗 母君のまろをきちう父夜乃たてあり行はざり
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう

ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう

ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう
 ちうしんあつていふらうしうあひちうらうしういふらうしう

の命婦よあけり給ふと又つづよはさへそらひ給ふらうて
それどかくの給ふまへ細 大納言乃心所と母君
のせいのしはらうて給らうや

ふひあるはらふたこそ思わさうつれやうひさしやさうらの給
もきさうとあられり 於果 天子の御心を交交とし
君よもとさひ給しうもさうひるはと也

おほい給う 果けつのはゆと母君乃甲のさうとあやう給也
かくてさうのつうつうあまるとおひお給うはらへさしはめて
もありあん命あうやうとあまひ給んとせめらうとの給うす
かきつ乃西親也わ宮のわひうら給うと母君乃を
うらあうたれい命たうれいとしさひわんし給也
かのさうらと物給しんせさん 果前と給らうあうと命婦
よはらうたれい給しんせさんをさうと也花もさうと母君よ

かきつ乃かんとななるやうにの給らううう

かかん乃かんとななるやうにの給らううう

か果も揚妃乃事とつうお士いもそにききれよあひ
てうもさうとさうとさうと玄宗よかんをなうししきハ
うんはらうらうとあうと文交も命婦ははらうとれいも妃
よあひらうやれらうのむさうあうらうとらあお
あひらうとらうひらうとさうもあう也あひはらうとあお
の事とさうらうそのさうもあうとらうと也
花もさう條功道士幻術とまて蓬萊山とあうて揚まら
妃よあひらうと玄宗乃心所とはらうとらうと揚まらその
あうとの物給しんせさんはらうと時金釵と細合とさう
はらうと物給しんせさんはらうとさうと引れて給しうとさうと

心とつり

河海 長恨奇 ナニヤキ 左液芙蓉未央柳 對此如何不淚垂

後成 ヒミヤキ 中子 ヒミヤキ 未央柳 ヒミヤキ の一向と ヒミヤキ 凡をもあらしに ヒミヤキ 志ハ

竹成 ヒミヤキ 月筆 ヒミヤキ の本 ヒミヤキ 板 ヒミヤキ と又 ヒミヤキ 親 ヒミヤキ 云 ヒミヤキ 六条院 ヒミヤキ の女 ヒミヤキ あり

女三官 ヒミヤキ と二月 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも ヒミヤキ 人 ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも

にた ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも

細 ヒミヤキ る ヒミヤキ 未央柳 ヒミヤキ と ヒミヤキ れ ヒミヤキ は ヒミヤキ つ ヒミヤキ れ ヒミヤキ と ヒミヤキ 際 ヒミヤキ とも ヒミヤキ ら ヒミヤキ て ヒミヤキ 云 ヒミヤキ あ ヒミヤキ う ヒミヤキ

凡 ヒミヤキ も ヒミヤキ とも ヒミヤキ ら ヒミヤキ に ヒミヤキ 志 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも

み ヒミヤキ へ ヒミヤキ 未央柳 ヒミヤキ の ヒミヤキ 一向 ヒミヤキ と ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも

これ ヒミヤキ とも ヒミヤキ は ヒミヤキ 一向 ヒミヤキ と ヒミヤキ 際 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも

柳 ヒミヤキ の ヒミヤキ 祠 ヒミヤキ あり ヒミヤキ 後 ヒミヤキ は ヒミヤキ 一向 ヒミヤキ と ヒミヤキ 際 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも

太液 ヒミヤキ と ヒミヤキ ハ ヒミヤキ 池 ヒミヤキ の ヒミヤキ 名 ヒミヤキ 也 ヒミヤキ 芙蓉 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも

ハ官 ヒミヤキ の ヒミヤキ 名 ヒミヤキ 也 ヒミヤキ 芙蓉 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも

あ ヒミヤキ う ヒミヤキ う ヒミヤキ う ヒミヤキ た ヒミヤキ も ヒミヤキ あ ヒミヤキ り ヒミヤキ し ヒミヤキ と ヒミヤキ あ ヒミヤキ へ ヒミヤキ う ヒミヤキ づ ヒミヤキ だ ヒミヤキ

の ヒミヤキ 事 ヒミヤキ と ヒミヤキ け ヒミヤキ の ヒミヤキ の ヒミヤキ 筋 ヒミヤキ あり ヒミヤキ う ヒミヤキ ら ヒミヤキ う ヒミヤキ 事 ヒミヤキ を ヒミヤキ せ ヒミヤキ ら ヒミヤキ い ヒミヤキ と ヒミヤキ 行 ヒミヤキ う ヒミヤキ 事 ヒミヤキ とも

花 ヒミヤキ の ヒミヤキ 向 ヒミヤキ あり ヒミヤキ ひ ヒミヤキ き ヒミヤキ た ヒミヤキ ら ヒミヤキ う ヒミヤキ と ヒミヤキ あり ヒミヤキ とも ヒミヤキ の ヒミヤキ 柳 ヒミヤキ とも

一 ヒミヤキ 花 ヒミヤキ の ヒミヤキ 説 ヒミヤキ と ヒミヤキ か ヒミヤキ へ ヒミヤキ さ ヒミヤキ る ヒミヤキ よ ヒミヤキ ら ヒミヤキ れ ヒミヤキ と ヒミヤキ 云 ヒミヤキ の ヒミヤキ 筋 ヒミヤキ 物 ヒミヤキ 也 ヒミヤキ

のそくし揚も死のくめつらうそくハ芙蓉柳よそ
る支夜のさうじう説くもきありしあそくハ言死
の向よあむさなてしこの落れぬらにうそくたりさ
りあうそれ色ひそして時のゆゆやうハそくも
うくありぬれしやうじうはゆふ花のさくもき
もよくそくきしやうじうさくさくうくぬらうく心ば
りてんぬれハ前故相違ともる死よやそくし原氏の
中一箇うあういんものむにはよそくううく
花のさくもきうそくよそくさくさくさく

并花云あそくをりし中あそくさくさく
むそくさくさくしあそくのさくもきうそくさくさく
さくさくさくしてさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

思ふよハ花もさくさくさくさくさくさくさく
柳にそくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさく

あそくさくさくさくさくさくさくさく
あそくさくさくさくさくさくさくさく
あそくさくさくさくさくさくさくさく

長恨云 在天願作比翼鳥 在地願為連理枝
天曆

あそくさくさくさくさくさくさくさく
あそくさくさくさくさくさくさくさく
あそくさくさくさくさくさくさくさく

日

四四〇

夕殿セツテン魚丸イサワル思情シヨウ然秋燈挑シテ尽ツキ味アジ寝ネ去根奇キ

たことろはくまのこれわりの色さうこぼるはうにありぬるあ
れへー 此宗 是ハ禁中みく実乃一刻よると左近東と

のあまをうー地をふのりてふまてはとむる也らて
名と来よ丑の一刻よるとせのあはれうてあのみはる也
らてこそこのあはれ色さうゆわは丑ウシにありぬる成へし
やうる也

んらとあはれうてうぬのあまをうーをうるもあはれまも
あまをうるもあまをうー

妻ツメ計ケイありぬるハ大妻戸オホツメド一間也

あーそにぬれをうるもあまをうーをうるもあまをうー
あつるにんも

あつるにんも
あつるにんも

気がぬる根あれぬとよめる也

春宵ハルヨイ若短ニギハヤヒ目高起メタカキ後此君王ノチノキミ不早朝フササキ

此宗 去宗の揚中ヨウナカれと寝をもとほひー時乃事也相意

うはつハ文夜よとれ目高起はあけこの始りにハ機ハキの
あつるあまをうーをうるもあまをうーをうるもあまをうー

朝アサあまをうーをうるもあまをうーをうるもあまをうー

うらと寝ひぬへあまをうーをうるもあまをうーをうるもあまをうー

ておほくゆる也花を同定 細 去根奇ありぬるもあまをうー

世路セロ也ヤれレ乃ノ字ジ雅ヤ也

あまをうーをうるもあまをうーをうるもあまをうー
あまをうーをうるもあまをうーをうるもあまをうー
あまをうーをうるもあまをうーをうるもあまをうー

ハ後深草の文家よりそんごうに修るもれたらひるるし
今も世中とて世の中一とてそんごうに修るもれたらひるるし

此世より事とて人かたよりうらまをて修る也

とてまのくしむわさあり也 此果 國とい字ぬしん改くしき

元あいうえとろ又字ぬひる也 事然

本年

何とことこれのつう天照やむめれ神とてりうとて修む

此のつうにわさうとてう天照やむめれ神とてりうとて修む

此果 楊をれうを修るは去宗うと升とて去修へんまを

とくにわたりしんんくとあけささうとて修るあり

私治 去修年 琵琶引 耳言 万葉 細 玄宗の福山うとこれの後と

あまらうとてあまを去く 素宗位よけを修りうとて修る

あまやらうと修るもてんのも也

月日るそわら官より修ぬとてこれ世乃物ありと

細 源氏も也り人の日教ありや

まじうにわらよとて修へれと 果 けりうとて修る

いと修しう修りしとて 此果 けりうの修るも也りうとて

けりうに奇特なるけりうとて中く修るあやうとて修る

とて修るこのけりう也何れもこのけりうとて修るあやうとて修る

かたへ

あまの修る年の春坊はさまり修る也 此果 朱雀院乃東

宮よりそり修るもてり 弊 けりうとて修るあり

けりうの修りて先坊とてり 柳 春に大系修り身とて

何れもこのけりうとて修る也何れもこのけりうとて修る

せとてやうしむりくきは物修の先坊よけとて修るあり

まじうに大系院乃修り子小一系院の去宮と修りてとて修る

皇に成給は物緒の後のふとまれともあはの別あつと
程もる也多 細 朱雀院の御事也 醍醐タケノ法休ホウキすし末宮
又コトヒコたふ子 保明ホウメイ 堯志ヒコシ行の故慶頼ケイレン王立坊又早世サハシ後
朱雀院立坊也

世にこの後けり一う物ゆせはほろろもまへ人さくともく
中こそせろうもせりく中一死ありとたれん中くあやしく物ゆ
しとくろくもくもあもてつこもせりつたふるとぬらげ

此果 是ハ源氏乃君と朱雀院よりととあらして美宮に
きてて中一死とのけつ乃法也

さころくとおほくまれとぬらりくもあらとたれぬ
此源氏とつみと天子ともおほく一う一世中れんとも
たしくおひもるんはされとも順ジュンギキ義ヨシよりうもて朱雀院乃
はさまり行り物結乃ゆる人一

世人とさころし 果 せろんとの文字とさつりくもむひし

多ゆハ後宮多源乃御律世仁とせハおそれぬ心也
女侍も心むらるぬぬ ぬらきこ人の心よと源氏乃
若果まふもや立給とむとあやしくおほくぬらぬ
とらく朱雀院よりさつり行ハ御心ぬらつとさつり家と
あり 細 女侍の心業坊也

この語とさつりく ぬ 文夜の母君れぬ也とんとハ根
母をさつり源氏の語とあうもやむむとつ死の共とつと
からも根母とあはりくもさつり 河海 拾遺シヨウイ源室ゲンシツ之母乃
ぬらりくさつりあむむとこの事とつとつありてさつり
事とてえげさつりつとつありぬらとつとつとつり
もこれハおほくのつらんとあり

わちのあやも思ふまじつとつりしては我はなほつらぬあつり

わらわの思ひこもへにけりも思ひこもへなるものなほとらも
井やせりしよるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
心ありしかるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
そのころはもうものならぬ中へ まはるるるるるるるるるるるるるるるるるる
しむらおんかきもあつたといふて

まうぬらひのさむらひ後也
宮ろつらひめさむらひのさむらひに いお
此深 エンギ 是ハ西喜の文侍のりはる也寛平は侍のさむら
なる又 テイレ 子院とさも也 チヨク 宗師はまへりていふるはなぬる
はのめれまゝのしむらひにさむらひのさむらひもいふるはなぬるはなぬる
鴨籠 コノコ にはけりしをえんる也 カミ 元暦の寛平は侍
しむらひめさむらひのさむらひに サキ かのいふるはなぬるはなぬる

必ずしもいふてはなぬるはなぬるはなぬるはなぬるはなぬるはなぬる
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
このみこと鴨籠はけりしをえんる也 カミ 元暦 ニシヤ 此深 ニシヤ 是ハ英國より
なるる人とならるる也 カミ 元暦 ニシヤ 此深 ニシヤ 是ハ英國より
とら東寺といふるをえんる カミ 元暦 ニシヤ 此深 ニシヤ 是ハ英國より
寮といふは ホツシ 所也 カミ 元暦 ニシヤ 此深 ニシヤ 是ハ英國より
番を客也 カミ 元暦 ニシヤ 此深 ニシヤ 是ハ英國より
せしむるに番客とせらるるは寮はけりしをえんる也 カミ 元暦 ニシヤ 此深 ニシヤ 是ハ英國より
鴨籠の籠は後の茶と目鹿鴨乃ちるるるるるるるるるるるるるるるる
故に鴨籠は色といふるをえんる カミ 元暦 ニシヤ 此深 ニシヤ 是ハ英國より
りけりしをえんる カミ 元暦 ニシヤ 此深 ニシヤ 是ハ英國より
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

けうし海をくちらうくはうらうらる 於原氏のまゝりけうし
らこのやうにきほくまするやうにせ

おんはち大弁の子のやうにけのまをせしめ 細らうちの物結も

おんはち大弁の子のやうにけのまをせしめ 細らうちの物結も

わくまをぬ 采引わくしでしむるの心也

おんはち大弁の子のやうにけのまをせしめ 細らうちの物結も

一たる神也とて又これにきく人あはれとるまじき

か海をくちらうくはうらうらる 於原氏のまゝりけうし

あやうし國のあやとぬて帝王のまゝに位よのあやうし

はくちらうくはうらうらるのまをせしめとるまじき

やあうしあやとぬて帝王のまゝに位よのあやうし

これに又うのけうちらうらる 於原氏のまゝりけうし

親玉母とてうらうらるのまをせしめとるまじき

ものみやうしとてうらうらるのまをせしめとるまじき

のほくしとてうらうらるのまをせしめとるまじき

つにわらわらうらうらるのまをせしめとるまじき

又弘徽^{コウキ}殿^{テン}とてうらうらるのまをせしめとるまじき

あうらあやとぬて帝王のまゝに位よのあやうし

はくしとてうらうらるのまをせしめとるまじき

あうらあやとぬて帝王のまゝに位よのあやうし

とてうらうらるのまをせしめとるまじき

とてうらうらるのまをせしめとるまじき

わあうしとてうらうらるのまをせしめとるまじき

あうらあやとぬて帝王のまゝに位よのあやうし

とてうらうらるのまをせしめとるまじき

されまゝありあはれやまのけうしめとの格政園白は天
 下と補佐しなまもも也原氏のまははあふさうとえ
 孫一ふあはれやまのけうしめはまはらうさうあしとふ
 あり事花あはれやまのけうしめは成るあしとふさう
 事れおいたるありしとらじあつとやたるあしとふ
 きのわのめとあはれやまのけうしめはあはれやまの
 とえ孫つるゆんよまおきうやとふとまは津菟王乃太
 子延生のもた阿松多仙人はらしまの清とれつあ
 ひまたりとて細園乃あやまありてとれつあはれやまの
 孫つる言いしめとあつとあつとありてあつとあ
 してつるへて天下とまはらうとあつとあつとあつとあ
 きはらうとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ
 あり

年といつとあえうとあはれやまのけうしめとあつとあつとあつとあ

とあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

姓 伎 同 莊子 橋士 細 ちんせいのあつとあつとあつとあ

孫 容 沙 花 とまはらうとあつとあつとあつとあつとあつとあ

とまはらうとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

とまはらうとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

いとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

とまはらうとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

とまはらうとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

とまはらうとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

とまはらうとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

とまはらうとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

とまはらうとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあ

みまをりてはりれたる向とははらるる行つる御座ありてま
はらばら 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

まらめりてなる也

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

此原氏の事

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

此原氏の事

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

此原氏の事

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

此原氏の事

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

此原氏の事

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

此原氏の事

まらめりてなる也 此原氏の事をいふなる侍と御座りたるにま

王と申す也又親王にありける天位ははをけるんる也
 ありつとけつやまをらうとぬはしあをきてこのまんと
 けりあもあさせ給りぬ也一乃清子六太長女清はり
 みてわもくうひた死三十一に射し源氏の美
 と六外尺のよをあ死とつり清母ふたよをあも死んあ
 きれの清子よもたけりぬきいとうあ死清心とて
 と也よをあ死とい十縁乃後也 元名同 漂日本紀
 洋々文選 濬海濱 細花日本紀
 ころくみくぬはやまのけうろととるあんけり死をそ
 のもいをけるよとぬはしあをきて

此橋政園白の位とみとの清とるやいさく人の給也
 親王乃分派本なるもはらと行とつり 允信日本紀
 直仁 浮舟物給志日本紀

ゆきくみらくのけをとあもて行まらうとらうとく
 ぬた人よきいとけうとぬはしあをきて 茶 天下とるまはく

を死んかかもんあてはありうろく人さうりんて
 無字行政如去燭夜行人本不字不時知道 細流同

みもぬ給ひあせせらうひわむけぬるくものけ行も
 源氏と申すもをらうとぬはしあをきて 行んうとせ中れ人今
 たうひやんまことの後也

もくえうのうと死みらの今うむじらを給すまもぬはし
 さはよかせし 此宿曜 廿八宿 九曜の初度とて人乃
 運命とんうぬゆん也せんもんうもこのあもけりうか
 をとうもわもめけううとてよむへ 宿曜作人乃運
 命とんうぬゆん也

源氏よあしなるんくぬはしあをきて

元服の初は原氏の姓と終は六条院に主例なるべし
河海より

年月より... 宗は... ありぬるに... 先帝は... 河海は... 一得

乃法親は朱雀院... ありて... 皇は... 乃子内親王仁和... 河海は... 乃事也

の御事しほんもあかしくもあはれんもあはれん

かよのついでに思ひつゝもあはれんもあはれん

ある中にあはれんもあはれんもあはれん

いとも行つれど清年ハもあはれんもあはれん

わつちつゝもあはれんもあはれん

まほしくもあはれんもあはれん

わつちつゝもあはれんもあはれん

わつちつゝもあはれんもあはれん

わつちつゝもあはれんもあはれん

わつちつゝもあはれんもあはれん

わつちつゝもあはれんもあはれん

わつちつゝもあはれんもあはれん

わつちつゝもあはれんもあはれん

わつちつゝもあはれんもあはれん

木

新廣親王

二式丁の女皇太子宮中子
延喜八年二月廿八日薨

号玉光元宮好色云双

の美人也太子御是忠親王

仁和寺後始賜源姓号元源

中納言源光

仁明天皇源氏
号画三条

延喜元年任右大臣

白野系画といふものより長きゆりとも元源氏とこれ

とていふ

友はゆりあつひはつとほはゆりともとらふとあれたるや
白の宮ともいふ也 此 友と源氏の君とあらあ

ひはゆりへに源氏といふえとも也友と源氏ともいふ也

つはゆりへにありては源氏ともいふ也 モサリ 三ノ 三ノ 三ノ

とていふと源氏ともいふ也 モサリ 三ノ 三ノ 三ノ

やとる意といふ也 モサリ 三ノ 三ノ 三ノ

事といは物結といひていふ也 モサリ 三ノ 三ノ 三ノ

女と東の所
十二葉の内 十二葉の内

世の人やこれ

采花物語

白皇女入内事
皇子内親王

朱雀院御女

は君乃はつとほはゆりともとらふとあれたるやと十二

ては元服しては 此 十二と元服乃と大略のほ也

河海 人生十二と一周といひ采冠冠礼とも也

新法 の別ありき

おたらしはゆりともとらふとあれたるや 采花物語 白皇女入内事 皇子内親王 朱雀院御女

ある也 新法 別 ありき

うとらふとあれたるやとらふとあれたるや 采花物語 白皇女入内事 皇子内親王 朱雀院御女

元服るといふ事官のやういふ事 采花物語 白皇女入内事 皇子内親王 朱雀院御女

元服るといふ事官のやういふ事 采花物語 白皇女入内事 皇子内親王 朱雀院御女

とらふとあれたるやとらふとあれたるや 采花物語 白皇女入内事 皇子内親王 朱雀院御女

いとまの春宮のほ元服南度ありとらふとあれたるや 采花物語 白皇女入内事 皇子内親王 朱雀院御女

いとまの春宮のほ元服南度ありとらふとあれたるや 采花物語 白皇女入内事 皇子内親王 朱雀院御女

同

同

その年の皇子の法涼殿より有は也

甲子の御成敗の法涼殿より有は也

乙未の御成敗の法涼殿より有は也

丙申の御成敗の法涼殿より有は也

丁酉の御成敗の法涼殿より有は也

戊戌の御成敗の法涼殿より有は也

己亥の御成敗の法涼殿より有は也

庚子の御成敗の法涼殿より有は也

辛丑の御成敗の法涼殿より有は也

壬寅の御成敗の法涼殿より有は也

癸卯の御成敗の法涼殿より有は也

甲辰の御成敗の法涼殿より有は也

乙巳の御成敗の法涼殿より有は也

丙午の御成敗の法涼殿より有は也

丁未の御成敗の法涼殿より有は也

戊申の御成敗の法涼殿より有は也

己酉の御成敗の法涼殿より有は也

庚戌の御成敗の法涼殿より有は也

辛亥の御成敗の法涼殿より有は也

壬子の御成敗の法涼殿より有は也

癸丑の御成敗の法涼殿より有は也

甲寅の御成敗の法涼殿より有は也

乙卯の御成敗の法涼殿より有は也

丙辰の御成敗の法涼殿より有は也

丁巳の御成敗の法涼殿より有は也

戊午の御成敗の法涼殿より有は也

己未の御成敗の法涼殿より有は也

庚申の御成敗の法涼殿より有は也

辛酉の御成敗の法涼殿より有は也

多分あり下の物よきよりなるはるくしとそく
 何事と理髪乃んてかんとするもそれと
 らしと兼官しそふたりをん政乃大務なるん
 又大務の務んかて一けり理髪大務に別あり
 うるらと一はくはやとそくらにうて行く
 果らつてつものやまに花をにらうてこれあり
 法をもちうるて 元服のあはるく々の袍乃つをぬぬ
 せらやきしは也元服の後ハ揚と縫て美ちる袍を
 せらうる也又清若もつう方紙花もふこれあり
 ちうてちうちてうつうつと由は若く海也
 此親王の下の元服稱舞ハ清涼殿の東乃意めては
 若くもつてありつとまの元服ハ南海の式もく
 それハ堂とあくを舞ありとの原氏のまハ庭より

けりけりてはつと群し給はるも去宮あてまう由さ
 堂とあく義式あるもとと法つとそかのくも
 ねとけつとつう又一係ゆるえ君の操神奇特けり感
 しての法もつう 兼官の法元服ハ南海もて堂
 とあて稱あるもこれ堂下もくはるゆ今もみか海也
 せやふもあつはらももまは原氏の容儀を返す
 感さる心可也
 みるもつてつてええのひあけりたわや
 とあつと理髪乃んてかんとするもそれと
 果らつてつものやまに花をにらうてこれあり
 兼の入りもつてつてええのひあけりたわや
 うあつと原氏のまも元服ハ南海の式もく
 あつとつてつてええのひあけりたわや

ついで源氏の西元^上賜ハせつとありてその
ついで清盛ハ廢上ありてとんてきるとありて其
元亨二年也

くく物目みさちとあるやとんてそのついで
源氏はきき路あり

源氏はきき路あり 宗沙酒 日本紀 酒同

ついでとんてきるとありてそのついで
ついでとんてきるとありてそのついで

大長 日本紀 細 今引入大長

ついでとんてきるとありてそのついで
ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

物のけくまう死後ありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

ついでとんてきるとありてそのついで

くは終り終 昇花 同云列入大長トシノイカキの糸に襦と行事も例
阿の元 コトヘテ 源氏乃君の元服はふくしと行るハ宮の
法元服の時乃養と養とあるありその内を法元服と
を給也 細 元服の襦と終る也

その日乃君の人の母と御の物にものちと右大弁あへる事
終るははくうううとせある 五果 折桂本とてをある

つひの折乃事也二物とハ行ふくうんを家終成へし
阿海 献物也或終物 系終 西宮紀云本物枝也 もよ 菓也

菓とてふんううとやうと志うてふ菓とてく本枝 オシ
付也大長つ下みて後子之膳アに行て潤せ家元服乃

時の人乃さきある物也 トシ 掌中曆曰 五菓 梅 橘
栗 柿 梨 系終 献物ハ也 オシ 元服乃人の事物也

乃中乃終よはる紙ハ終物とて又折桂よいりあると

あり親王元服の時奉献物なり云云つ下これとて庭
中に列立しむる時才乃大長一人座よとてまうてちその
物もや君ぬれハ上首の人としてつり菓乃なる法費
とやてとのく物乃のみとさういそ付大長終云うとて
に終へとありら膳ア内膳可等とてん出て法元也一菓
源氏の元服もて献物なりやきしは物後の内り
何の中はとてとら入はを終とてこれハ一世乃源氏の元
服あれとて親王の時乃例とてて献物とて大弁う
を給りて コトヘテ 菓也 和秘抄 折乃御入を
らひの也とて入る菓也 細 折乃御と法也折乃
つれはる物也

とんじたるはくううの菓とて 和秘抄 同云
ひひとて養式乃時下らうにららる物也 和秘抄 同云

河海 トニキキ 屯食 トニキキ 極幸 トニキキ 極内 トニキキ 極察 トニキキ 極也 トニキキ 春宮

沖元服は是阿爾親王元服みせられる元服なりし是

と結梅之儀元服に略す トニキキ 屯食ハ元服の人乃本家

に結陣の役志は是とりち行りの也西宮抄に是子

見し事と親王元服の時も結陣の志宮たりんとの

下知して細すしは是源氏元服より源氏也極幸

を親王以下元服みせられし事と云ふ事源氏の元服

の時より也是下の詞は是云ふ事元服より云ふ事なり

細 トニキキ 河海は是なり

と云ふ事なり是云ふ事なり是云ふ事なり

細 トニキキ 河海は是なり

そのおもしろき事なり源氏の事なり是云ふ事なり

細 トニキキ 河海は是なり

おもしろき事なり是云ふ事なり是云ふ事なり

細 トニキキ 河海は是なり

おもしろき事なり是云ふ事なり是云ふ事なり

細 トニキキ 河海は是なり

おもしろき事なり是云ふ事なり是云ふ事なり

細 トニキキ 河海は是なり

おもしろき事なり是云ふ事なり是云ふ事なり

細 トニキキ 河海は是なり

おもしろき事なり是云ふ事なり是云ふ事なり

細 トニキキ 河海は是なり

おもしろき事なり是云ふ事なり是云ふ事なり

細 トニキキ 河海は是なり

おもしろき事なり是云ふ事なり是云ふ事なり

いざりて行やせ

相

七十一

まゝの語はほちめてはむい世中と云う行へま右の語も
語りしはしき地もとあつてと云うこれ行なり

采弘徽子の父右大臣の采直院の語は弘文の傳也

清子とも阿まつてと云ういづれの語よ

采右大臣清子たちらるる也

宮の語りしを養人のおぼあつてと云う行なり

此これの養上の金^{ニヤキヤウ}あり後又中ねとすし源氏と語

中より行なり也 細後の語は乃ち也

右の語も乃ち中いづれと云うねとえんもくしあつてし

つゝ語りしを阿まつて行なり 此右大臣と右大臣の語

中より行なり也 清子も少將と右大臣の語は乃ち行なり

てこの語も阿まつて行なり也

いづれもていつたをいづれと云うまかりし語あり

あじ 此右大臣に源氏乃ちと云うは乃ち右大臣の語

らに右大臣と語人かおなりと云う行なり也

源氏乃ちと云うの語は乃ちと云うと云う行なり也

と云うと云う語りしは乃ちと云うと云うと云うと云う

あつと云うひまの語もあつと云うと云うと云うと云う

と云うと云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う

此采 采弘徽子の語も乃ちと云うと云うと云うと云う

と云うと云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う

此采弘徽子の語も乃ちと云うと云うと云うと云う

おぼいあはれは乃ちの語も乃ちと云うと云うと云うと云う

行なり也 此源氏の語も乃ちと云うと云うと云うと云う

相

七十一

1. 凡有... 2. 凡有... 3. 凡有... 4. 凡有... 5. 凡有... 6. 凡有... 7. 凡有... 8. 凡有... 9. 凡有... 10. 凡有...

